

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

根っこでつながる！？「リバーズ・ジェンダー・ギャップ」と学校に行けない子どもたち

鴨川 明子 (山梨大学大学院総合研究部教育学域准教授)



マラヤ大学のカフェテリアを上階から見た景色 (筆者撮影)

1990 年代後半のこと。留学先のマラヤ大学で、カフェテリアを上階からぼーっと眺めていると、ピンクや水色のスカーフを身にまとう女子学生が多いことに気づき、思わずシャッターボタンを押した。そして今でも、この写真を用いながら、大学の講義や学会発表で「リバーズ・ジェンダー・ギャップ」現象について説明している。

マレーシアの教育を専門に研究を始めてから四半世紀を越えた。仮に研究生生活を 50 年とすると、ようやくハーフアニバーサリーを迎えたと言ってもよいかもしれない。そんな筆者が、マレーシアの教育に本格的に興味を持つようになったきっかけの一つに、冒頭の景色に象徴される教育とジェンダーの問題がある。

ただし、マレーシアの場合には、大学において、男性の方が女性よりも得ている教育機会が少ない「リバーズ・ジェンダー・ギャップ」が見られる点がとてもユニークで、この現象を「問題」とみなしてよいのかは目下検討中である。

最近でこそ大学のジェンダーバランスはそこかしこで話題になっているが、マレーシアの場合には、90 年代後半に国を代表するマラヤ大学において、女性の数が男性の数を上回っていた。筆者は、こうしたユニークな点に光を当てたいと思って、マレーシアの教育について研究を続けてきた。

ところが、マレーシアの教育は、どちらかと言うと批判にさらされることの方が多いうように思う。誤解を恐れずに言えば、もう少し積極的に評価されても良い面があるのではないかとも思っている。大学の「リバーズ・ジェンダー・ギャップ」もさることながら、「学校に行けない子どもたち (Out-of-School Children and Youth: OOSCY、ウスキーと呼ぶ)」の少なさも、光を当てたいと思っている現象の一つである。

東南アジア諸国連合 (ASEAN) 諸国は経済的に豊かになってきたものの、最後の数パーセントの子

どもたちがなかなか小学校や中学校に行く機会がない。そのことは各国政府や国際機関の間で問題視され、OOSCY に対する支援に力が注がれている。

そんな中で、国連教育科学文化機関 (ユネスコ) 統計研究所のウェブサイトによると、マレーシアの OOSCY は学齢期の子どもたちの、実に 1.4 % (2019 年) にまで減少している。この割合は、他の ASEAN 諸国に比して非常に低い。

さらに、マレーシア教育省は、OOSCY に関する ASEAN 宣言ワークショップ (17 年) において、先住民、ホームレスやストリートチルドレン、長期病気療養児、触法少年少女、未登録児童生徒 (Undocumented Children: UC) を対象に定め、彼・彼女らを支援するアクションプランを公表している。国連児童基金 (ユニセフ) もまた、OOSCY を積極的に支援している。

しかしながら、さほど楽観的にマレーシアの OOSCY の現状を見ているのではなく、問題も残されていると筆者は認識している。まず、いまだ 4 万 1,336 人もの子どもたちが小学校に通うことができていない (ユネスコ統計研究所) という「事実」を無視することはできないだろう。

しかも、ユネスコ・バンコク事務所の担当者によると、この「事実」を表す数値の中には、移民や難民の子ども数の正確な数は含まれていないという。さらに、マレーシアの場合、男の子の教育不振や教育離脱が顕著に見られる。

大学のリバーズ・ジェンダー・ギャップと、小学校や中学校に行けない子どもたちの「問題」は、実は根っこでつながっているかもしれない。この課題に、残り半分の研究生生活で取り組んでいきたいと思っている。

< 筆者紹介 >

早稲田大学助手・助教などを経て現職。近著に「マレーシアの公立大学における「リバーズ・ジェンダー・ギャップ」 進む女性の高学歴化、その光と影」長沢栄治監修、服部美奈・小林寧子編『イスラム・ジェンダー・スタディーズ第 3 巻 教育とエンパワーメント』(明石書店 2020 年)、「マレーシアにおける学校に行けない子どもたち 「最後のターゲット」 貧困層・遠隔地・先住民に対する教育支援」乾美紀編『ASEAN 諸国の学校に行けない子どもたち』(東信堂、2023 年)、『比較教育学のライフストーリー 研究スキル×キャリア形成』(共編著、東信堂、2023 年) など。